



研究会・見学会報告

～第1回（通算第3回）発火具研究会見学会～

阿波国大田井産・椿泊産の火打石を訪ねて

1 はじめに

再開した発火具研究会（旧火打石研究会）第1回の見学会は、2016年11月12日、13日に実施した。場所は以前より候補に挙がっていた四国・阿南市大田井の火打石産出地などに決まった。実際の見学は、会員の船築紀子氏に殆ど手配や段取りをやっていただいた。船築氏は何回か大田井の現地に足を運んでいて青いチャートの火打石を沢山表採されていたようである。また2010年には「大田井産チャートの流通と大坂近世都市」という論考を、『大阪府文化財センター研究報告第7集』に発表されている。

以下の報告にあるように、船築氏はチャートが大量に転がっている崖下を確認しており、その崖の上方に産出鉱が存在するのではないかと想定されていたようである。

本見学会の大きな成果は、初めて大田井の火打石採掘場を現地で確認できた点である。四国・大田井の青色チャートは江戸時代後期には、関西方面をはじめとして広く日本西部に流通する火打石である。この採掘場の確認は非常に大きな成果と言えよう。

ただ本報告はあくまでも概報であり、詳細な報告を船築氏にはお願いしたいと考えている。

2 研究会の実施

一日目に宿泊した旅館で、一時間弱であるが、夕食前に研究会を行った（図1）。参加



図1 研究会の様子（山盛りの刺身はしばしおあずけ）

者が近況等を報告し、また一日目の大田井の見学について感想を述べた。徳島県の考古学研究者の高島芳弘氏、西本沙織氏、島田豊彰氏からは県内での火打石や近世考古学の状況などを報告していただいた。

小林は、近年の江戸遺跡の報告書で接合事例が確認された豊島区の報告書『伝中・上富士前Ⅷ』と、新宿区でフロテーションにより小さい火打石が多数検出された『北町遺跡Ⅱ』について紹介した。また本日のテーマに関連して、宮崎の会員藤木聡氏から送っていただいた「近世における阿波大田井産チャート製火打石の流通」『西海考古第8号』2012の抜刷を参加者に紹介し、輪読した。（小林克）

3 見学会報告

一、概要

松江重頼の『毛吹草』（1645）に阿波 燧崎燧石として記された「椿泊産チャート」、小野蘭山の『本草綱目啓蒙』（1806）に、火

打石の産地として記された「大田井産チャート」の見学を行った。

椿泊産の火打石は、江戸時代前期から中期までの文献に登場し、流通していたことが伺える。しかし江戸時代中期～後期になると、大田井産の火打石の記載が増え、椿泊産の火打石の記述は確認できなくなる。

各地の近世都市でも、江戸時代中期以降に、大田井産の火打石の出土例が確認できるようになり、時期が下るにしたがって、大田井の出土例が増加する傾向にある。

大田井のチャートの採掘場については、大田井民俗誌基礎資料集（1981）で、森本嘉訓が報告しており、地元でもその伝承が伝わっていた。

筆者は現地見学会の前に行った現地の下見の際、地元の人から、火打石の採掘場がある場所について聞き取りを行った。採掘場までのルートも確認しておきたかったが、下見は筆者一人、急斜面の山地で、携帯は圏外。安全を考慮し、下見段階では採掘場の存在を確認することはせず、現地見学会で採掘場を探す手はずとした。

## 二、現地見学会

2016年11月12（土）、13（日）の1泊2日



図2 大田井見学会参加者

の日程で実施した。参加者は、小林克、北野隆亮、大西雅広、水野裕之、高島芳弘、西本沙織、島田豊彰、船築紀子の8人であった（図2）。

### ●一日目（12日）

午後12時に徳島駅に集合し、西本さん・船築の車に分乗して現地に向かう。

#### 《日程》

徳島駅集合⇒道の駅鮎の里（ここで高島さんが合流）⇒①大田井⇒現地調査を終えて、椿泊へ移動（②ゆきや荘にて宿泊。島田さん合流。）

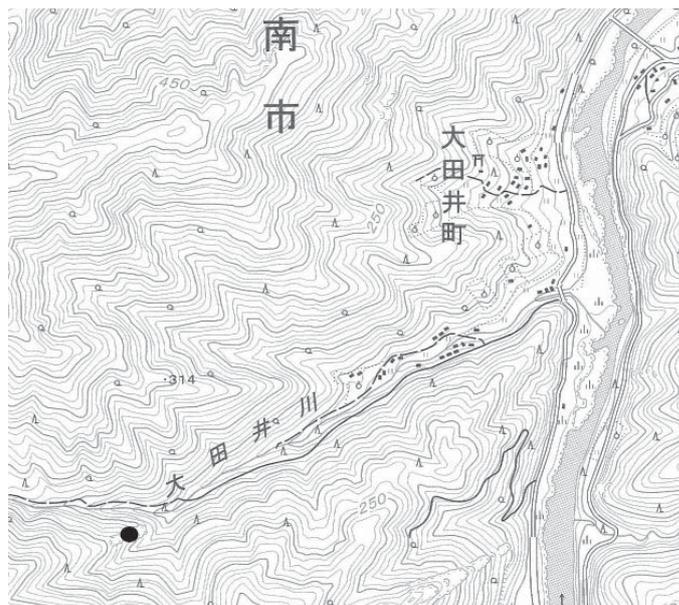


図3 大田井火打石採掘場位置図

●二日目（13日）

午後8時、燧崎へ移動。③チャートの褶曲岩壁の見学・採集⇒④森甚五郎屋敷発掘調査結果説明（阿南市教委・向井公紀氏）⇒森家墓所見学⇒駐車場にて解散⇒徳島駅へ移動。

以下は①～④までの見学概要。

①林道を上り、現地のズリ場に到着（図3）。林道脇には多量のチャートの割屑が散乱。小林・船

築は採掘場を探して登山開始。途中、3箇所の試し掘り箇所？を発見。さらに上の崖にもチャートの割屑が確認できたため（図4）、ロッククライミングしていくと、巨大な採掘場が姿を現した（図5.6）。幅約16m、奥行き約6m、高さ約2.5m！（埋没しており、実際にはもっと高さがあると考えられる。）大田井産火打石の採掘場を発見した瞬間である。



図4 大田井 垂直に切立つ崖



図5 大田井 火打石採掘場

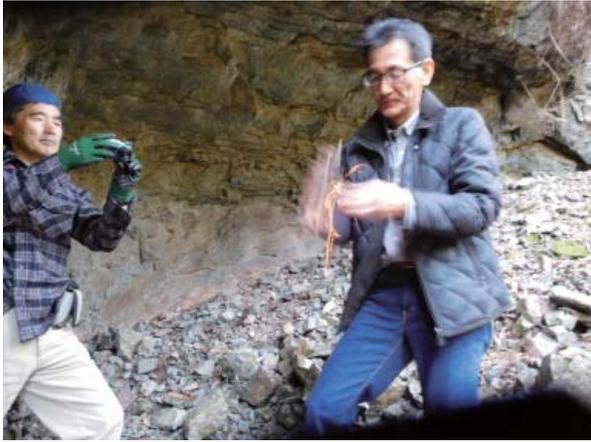


図6①大田井 火打石採掘場の石で火花を確かめる北野・大西会員



図6②大田井 採掘坑壁面に残る鑿痕跡

②宿泊は椿泊にあるゆきや荘。漁村独特の狭くクラク続出の道を、お宿の車で送迎される。夕食は、こんなに多量のお刺身や焼き魚、煮魚、揚げ物をどうしよう…と思うボリューム。

③燧崎のチャート褶曲岩壁の見学と採集（図7.8）。深緑色と赤色のチャートが採集できた。大田井のものと比較すると、火の出は悪く、強度不足の感は否めない。

④：阿南市教育委員会・向井氏の案内で、森甚五郎屋敷の発掘調査成果の説明と、森家の墓所を訪ねる。巨大な五輪塔が立ち並ぶ墓所の姿は、水軍の総大将の風格を存分に感じる内容であった。

【現地を見学される方への注意書き】

大田井の採掘場所は、急峻な崖となっております。登山中に落石の危険があります。携帯電話は圏外、付近に民家はありません。

また現地は四国山脈の大自然のど真ん中に位置しております。熊は出没しませんが、その他の野生動物や毒蛇に遭遇する危険があります。また冬季には猟区となっております、散弾銃を担いだ猟師さんが散見されます（筆者も以前遭遇いたしました）。

そのため、『単独での見学』および『猟期（冬期）の見学』は『絶対に！』お勧めできません。

（船築紀子）

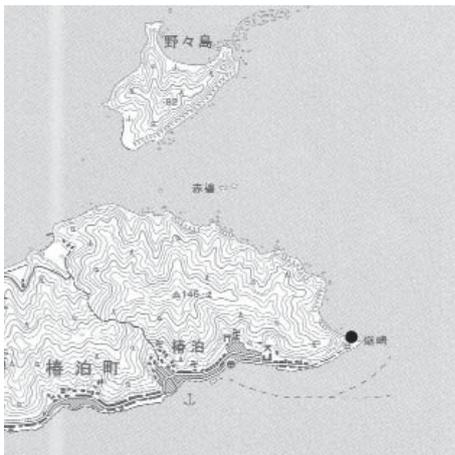


図7 椿泊 燧崎位置図



図8 椿泊 燧崎での火打石採取

## 信州善光寺 常燈燵

大西雅広

かつて骨董市で入手した「信州善光寺常燈燵」が、善光寺常燈明の火を用いて作られた燈明用であり、江戸時代の記録にもその名が記載されていることが判明した。そのため、簡単ではあるがここに紹介する。

「常燈燵」は、入手した時点では燵と包み紙とが分けられて包装されていたが、包み紙に鉄錆が付着していることや燵本体にも「善光寺」の鑿銘が認められることから、販売時に別装されたと考えられる。包み紙には「常燈燵 信州 善光寺」に朱印、5文字4行で「一度見常燈 永離三惡道 □□持香油 決定生極樂」の文字が木版摺される。紙を広げた大きさは縦が約30cm、横が約19cmである。折り目は横に四つ折り、縦は上下を折り返したように付いている。この折り目は、錆の付着箇所から推測すると、燵が入れられていた当時の折り目の可能性が高い。燵(火打金)は長さ4.5cm、幅1.5cmとやや小型で、刃部の厚さは3mmである。背部分は刃物の刃部状を呈していて木製の台に打ち込まれていたと考えられる。両面に鑿で文字を刻み、文字は片面に「善光寺」、もう一方が「□

冊燵」である。(□は判読不可能)

さて、善光寺の燵に関する記述であるが、明治37年(1904)に刊行された『長野繁盛記』には「常燈明の燵は、鍛冶のものその火を乞ふて作る。極めて清きものなればとて、燈明用に之を勤番所に乞ふもの多し」と記されており、「常燈燵」に関する記述である可能性が高い。善光寺において「常燈」というと、「常燈明」が知られている。善光寺の常燈明は、「不滅の常燈明」とも呼ばれている。この燈明は、善光寺縁起などによると、善光が燈明を灯していたが、ある時、油がなくなり灯が消えた際、善光寺如来が眉間の白毫から光を放って灯した燈明と伝えられている。その時、善行に伝えた言葉が「一度常燈明をみれば 永く三惡道を離る 何に況や香と油とを持つおや 決定して極樂に生ぜん」とされる。このことから、包み紙で欠損していた二文字は「何況」と考えられ、わずかに残った文字の一部からも肯定される。

この「常燈燵」は江戸時代の記録にも認められる。原典は確認していないが、湯浅 隆氏の「江



図1 包み紙



図2 燵「善光寺」の鑿銘



図3 燵「冊燵」の鑿銘

戸における開帳場の構成「享和三年善光寺出開帳の事例を中心として」 という論文によると、享和二年の善光寺江戸出開帳に関する文書の付属図面に「常燈燧」が認められる。この図面によると、「絵縁起所」という場所に「略縁起、常燈縁起」などと共に置かれることになっていたようである。また、氏が作成した善光寺が準備した御札類の一覧によると、「御火打」が3,000個用意されたようである。

以上、「信州善光寺 常燈燧」を簡単に紹介したが、不明な点も多く、今後も調査を進める予定で

ある。なお、この燧、現在は授与・頒布されていない。

#### 参考文献

岩井熊藏 1904『長野繁盛記 一名善光寺案内』丸上商店 明治37年 p27～28

湯浅 隆 1986「江戸における開帳場の構成「享和三年善光寺出開帳の事例を中心として」」『国立歴史民俗博物館研究報告』第11集 国立歴史民俗博物館 p21、p23、p31

### 【発火具研究ニュース】

第4回研究見学会は、本年度後半に実施したいと考えています。概要が決定次第、発火具研究会ホームページに掲載します。興味のある方は、同HPをみて、幹事（小林克、北野隆亮、大西雅広、水野裕之）等にお問い合わせください。なお、見学会は山奥の急斜面が想定されるため、足腰に自信の無い方はご遠慮下さい。

#### ニュースレター シレックス vol.3

発行 発火具研究会

発行日 2017年5月20日

編集 小林 克

HP：<http://www.ne.jp/asahi/hiuti/ishi/>

連絡先 〒215-0027

神奈川県川崎市麻生区岡上1624-5 小林克気付 発火具研究会

\* 本誌を引用する場合は、必ず出典・筆者等引用した旨を明記してください

### 【編集後記】

火打石研究会改め発火具研究会の研究連絡誌『シレックス第3号』をお届けします。2016年11月に、約10年ぶりに研究見学会を実施しました。四国、大田井の現地見学では、垂直に切り立つ岩をみて、私を含め参加者は横に進み採掘場を探しましたが、船築さんはその岩を登りし発見しました。船築さんが何回も現地に通っていた執念の成果だと思いました。

なお本誌第1号～3号は研究会ホームページからもダウンロードできます。